




 繡像 飛馬 始
 卷四



特別
 遠
 4



命平

旭文庫

遠門
882
卷

繪本 傾城飛馬始四文卷

造り物惣二回の高塚正回の内は門松立流小鼓の狛犬大傍り物
栗島屋鋪の表門の体右門の片腰は系物うねと陸尺待合
目出度太鼓にて幕初くと向ふ木柱本福之懸

是も上下にてそと取りと連ぬきてまで丹化道と行合

これへく表本弥五右衛門との市子息人目の市祝儀でござるの
内は外栗崎の屋簷への所礼は系上仕る外
外と先へお別れはヤませふ
お目出さふおんが外
お礼の席はお願と伺さ

明治三二年
十月十日
購求

下り舟主人のおまじりであつた。志づいて寂居しつゝの侍
 若芳の「あんと」は縁もござりませぬお前かぐつてませうと前
 是それ下りト云ふ切つてついで門の内、何の更じや折角物
 水取で取もあつと保まも栗喰の籠今の女の方量々ト云ふ
 仲弓太切此方の舟と云ふと棄て取盗賊と云ふ「あらんぞお
 さらよと云ふ」由もござるとい取盗賊あつたらんを極悪く
 さらさらと云ふ「アアあつたらんや」ト云ふト四郎は
 門の側へ「ハテいひごあなをいども其益の味入おもつたや
 駿馬とあつたやト云ふは余の舟にりあつた浪舟連五郎「あらん
 さらさらと云ふ「オオオオオ」ト云ふは首をたさしめらるる
 さらさらと云ふ「アアおごりいりみち身と誰と申す南海道は威と
 さらさらと云ふ

百姓徒黨の惣大抵尾子四郎太夫義久と云ふ家更身がまゐるを
 命あつたのと云ふのち「ナヤヤ命あつた」と云ふ
 かくも此前後の當國の津主栗島甲斐之助の舟家老と波玄部
 許同南伊達五郎と云ふと今南海道よりびある謀及の張本尾子四
 郎幸ひの仕出會人馬緒共引くる親念もござり「又更さらら
 うおも」此四郎と云ふ「あつたらんや」ト云ふは
 「は」と云ふは大小の鼓で回れぬと云ふは、通を
 送り物二重を其見附金襴上の方めり骨障子筋遠の家俵搦
 かると同家俵此東西は押送りつゝの二重を其見附後室小夜袴
 衣裳袴物白髪の後室と云ふは、通を
 持て居眠りあつたらん侍がなつた道具併り結ばず自在



こころしき

顔小白一家

舞の風

其角



うぐ
歌屋

びんが
軒十郎

さよ
浅尾
工左衛門

肩はくけえ幼とつまじき お侍 「こササちのりこ」がぬいと叶てやらふと深切ち
けうくとおとくまて

相洞それだまのめ うやま 「いづこもやまともいけのむすト」
まてりか

「子と思ふ親のむさ言ふいあふとらふ世の誘州ま部も伊達立郎とらふ
悴ともふ指子とまらふら身の上不便とらふ身若がることけりてや
程は行もまふおふきよははてまれ 後 「えくするもあふんとらふ

トお侍まのつとて 一男 「お部とぬこのお仕とけう後とらふの」
「後室とぬ〇
おふくつとらふ

お下後づれも今日へ浄家の浄者例 お若菜の節會 浄はひよ「万々
お目せふおなづけ ト皆く 辨言とらふ 種 「テモ結構おお向方でふん
とらふ うま 「中ま部とぬらふら お浄 同道とぬれす こえ あれせぬお中
らへ うま 「とらふとらふ い ヤ此との兼と跡とてとくと若殿方の
浄客林へ おの もうらぬ 甲斐 之助が病ま先程典業和氣法下と

やられて密とらふ又の吐 即 浄平余の秘法とぬれと早速と須いぬ
大切お業種 「エテ 其業種とぬ 「う や大切の秘法とらふ い られぬ
「く お 浄を 「や マラ若殿の病ま 武 家小い不吉と腰接いざり
浄者若菜扇鶴がわつてもめ い 直とぬ 浄 難病 「お 栗島の浄
家ゆと腰より下の難病とぬ 「若 殿のいざりの病いと志ぬ繩のふとぬ
の 栗 島の名物でうら 「三 人もたすれ 家 本の身と 「三 玉を
朝 「三 玉のあり今一言いめて又よとら達 身 の上とやむ 「イ ヤ全く
悪く 「中 のでとら お 若殿の浄病 氣 毒小なと お けり 「お けり
「お 外 へ 「う ま 「お 段 「得 けり 「入 ち 「て けり 「お 天 「不 時 「の 風 「雨
あり 「人 は 「不 時 「の 病 「は あり 「お けり 「又 人 「間 々 「病 の 「器 と 「あ り 「難 病 「は あり 「お けり
ら 「一 一 「は 今 「日 と 「大 切 「な 若 「菜 の 「節 會 「お 家 「と 祝 「し 若 「殿 と 「言 けり

拙者が執上後室の御上後下よりませふ、ト此の鯛をさき一分は是れ母
 それ子供あそびの「鯛」も又成鯛も才天照太神の方神蛭子
 升尊へあへるの御病にて天の岩舟にてとて人のいと當家の氏神と
 お成家のその世小栗大明神と唱へ此神のしゅうひつて御病平念ほじ
 古例とひて此成鯛の執上追付若殿の御病御本腰をい尚家々
 中へく武名の榮へさされれば家母の拙者近夏加よけの社会となまり
 歩る「糸」を御が賜ううがてううひつて此目出鯛をめでたくとさる甲斐
 足助が御腰追付吉光右将の「ませふ」一後室分の御幸當の程と輝か
 ぐうませ入すしてうめつ、トは内お種こそ「あつて」種「かく」種又なる
 ら希の御用が御「私」が頼んと受はつてさくんとてあふふうと又宿とつて
 通箇せよ「あ」るませぬとち、いふうも孝心ふ其方々色はる共が、あまな

この言付他國とさく此洲中と尋はるもやめてくれるといふ「サ」早
 遣ふと思へば、いふ内も気がせて待たぐ「さん」せぬさ、一「サ」道
 埋く「一」や兵部殿其女々竹園の者で、る「る」と「何」者で、る
 「サ」おゆさ、れい産の親と尋ん「為」る「産」れ古々とあり捨て方ぐ
 ともふい「い」糸の「で」る「一」テ大膽お女郎め、一「大」膽「ト」やゆんせぬ
 産の「い」は「い」産と「い」る「と」の「ア」物と「ヨ」尋「ふ」い「あ」の「一」人「も」も
 大膽お頼むもの「ト」やゆん「と」る「顔」をお侍お相人も「い」て「ト」る「い」れ
 中国出雲の國松江鎮是田村の百姓其茂九郎といふ「私」が「頼」む「か」れ
 とうふ「北」志「き」ん「て」候「ふ」二人「を」内「め」か「も」去年の秋風の念地と
 か「し」ら「ん」を「袖」ま「ら」尚「ま」は「ま」思「ひ」て「あ」ら「が」招「奉」の病お医者
 にも「われ」是「と」い「て」書「ふ」八「卦」も「今」度「も」大「事」「ト」あ「ぶ」いと「い」ふ

ご小子と思ふぬへあは習ひそれと捨てるも 綱筋も親分「アイト
「其帷子は」アイトお方へあは習ひそれと捨てるも 綱筋も親分「アイト
又後てあるま都も雛のま付と「中」後室さあ「ヤト」お方へあは習ひそれと捨てるも 綱筋も親分「アイト
「親子のまじ」何と不便も其女「雛は捨てるも 綱筋も親分「アイト
あこの方のお母様で喉は又透れるやうお母様やけさるも「是れ
まご兄弟がまごの「いと」實の養はるものも「何れも後になせぬ
いま「定ぬ」つらつ武士の浪人であら「アイ」お母様とやと死志もあ
んのものごらんでらん「か」てそあつらつ「つ」や「あ」ければ十九
ふんと「ま」都 其年号を「永禄四年辛酉の酉」三の年捨つらして
拾九也「俸」伴五郎も尚年十九也「私」が守りの「是」此女雛「男
雛といひは小「水」の流まこ「か」るのおお爺様「それ」もきてあつたも

とほつちやうま都「ま」都 綱筋も親分「アイト
おとどし入あつて「ま」都 綱筋も親分「アイト
花より「ま」都 綱筋も親分「アイト
より火急の浦上は今日尚館へ浦着との浦内との先ふれぬると
る者の換子と「ま」都 綱筋も親分「アイト
長の初め「ま」都 綱筋も親分「アイト
あつたの「ま」都 綱筋も親分「アイト
作の通り不時の浦上は使はれ「ま」都 綱筋も親分「アイト
おとどし早く「ま」都 綱筋も親分「アイト
でも大更らうやせぬえ「ま」都 綱筋も親分「アイト
「ま」都 綱筋も親分「アイト
つねに換子とおお爺「ま」都 綱筋も親分「アイト

の沛病氣也、若殿も作病でない実病のものあつて、裏の裏におる、
志や、お国と鎌倉におほひてあつた、伊達五郎、
三、そのあつた、尼子四郎、義久と見知て居る、
これ、近衛、藤原、藤原、
夢であつた、
我子の妻、
回、
奥の間、
おどや、
おひの、
仲、

あつた、お坐、
と、
お、
是、
お、
老、
と、
國、
と、
あ、
あ、

そんな事で我仁もあつたト云ふは、
先達て入道、
の通り、
ぬ、
ト、
只今、
志、
ぬ、
軍師、
請、
ん、

ニテ、
ト、
らん、
是、
ト、
造、
か、
重、
の、
弥、
ト、

陰々^{くもり}の道^{みち}も老^{おい}ても朽^{くち}ぬとらん^び本の^{ほん}ト冷^{ひや}方^{かた} 甲
 利^きの象^{しやう}白山^{はくしやん}地^ぢはけい
 ころ^{ころ}あり。○上^{かみ}宴^{えん}と^とのて^てトと厚^{あつ}一^{いち}宅^{たく}と^とん^んどる^{どる}上^{かみ}と^とら^らぬ^ぬ君^{きみ}を
 つつ^{つつ}入^{いれ}の上^{かみ}と^とふ^ふあり^{あり}それ^{それ}ト^ト上^{かみ}の本^{ほん}あり^{あり}其^{その}を^をや^やう^うに^にけ^けれ^れば^ば上^{かみ}を
 一^{いち}利^き乃^の卦^けと^と良^らと^とよ^よう^うて^て押^{おし}と^と下^{くだ}を^を良^らの^の山^{やま}也^{なり}押^{おし}と^と地^ぢなり^{なり}山^{やま}高^{たか}く^く地^ぢ
 小^こお^おり^りて^て却^{かえ}て^てふ^ふぶ^ぶや^やも^もる^るの^の愁^{しみ}あり^{あり}民^{たみ}と^と厚^{あつ}く^くと^とれ^れば^ば入^{いれ}居^ぐさ^さぼ^ぼう
 の^の猶^{なほ}い^いち^ち一^{いち}絨^{じやう}は^は君^{きみ}臣^{しん}の^のく^くと^とえ^えと^とて^て是^{これ}と^と合^あせ^せて^て是^{これ}徳^{とく}本^{ほん}論^{ろん} 一^{いち}中^{ちゆう}
 殿^{との}其^{その}を^を小^こ書^{しよ}物^{ぶつ}を^を山^{やま}々^々河^か流^{りゅう}あり^{あり}は^はは^はし^しと^とて^て河^か流^{りゅう}病^{びやう}気^きの上^{かみ}に
 お^お勞^{らう}でも^{でも}出^です^すて^て後^ご室^{しつ}の^のお^おむ^むづ^づい^いモ^モう^うよ^よふ^ふさ^され^れせ^せぬ^ぬの
 ち^ち一^{いち}い^いや^やく^く好^{この}の^の道^{みち}あ^あれ^れば^ば若^わく^くう^うふ^ふい^い 一^{いち}中^{ちゆう}其^{その}を^を小^こ事^じう^う学^{がく}問^{もん}
 と^とお^お好^{この}ま^まな^なれ^れし^しに^に殿^{との}は^は彈^{だん}う^うる^るが^が私^{わたし}が^がら^らと^とお^お身^みを^を中^{ちゆう}上^{かみ}の^の笑^{わら}
 かり^{かり}り^り井^いの^のち^ち 一^{いち}弥^や生^{せい}何^{なに}も^もと^とや^や 一^{いち}不^ふ正^{せい}月^{げつ}は^は婚^{こん}始^しと^とす^すは^はる^る

妻^{つま}へ^へ何^{なに}の^のと^とで^でり^りゆ^ゆえ^え 一^{いち}それ^{それ}む^むめ^め始^しと^とす^すは^はる^るら^らん^んい^いち^ちは^はる^るは^は正月^{しょうげつ}始^し
 馬^{うま}場^ば殿^{との}二^に甲^がの^の馬^{うま}二^に騎^きと^とけ^ける^る是^{これ}飛^{とび}馬^ばと^と書^かて^てむ^むめ^め始^しと^と唱^なふ^ふさ^さる^る
 曆^{れき}の^の元^{げん}日^{にち}小^こあ^ある^るこの^{この}妻^{つま}は^はり^りづ^づの^のひ^ひあ^あ始^しと^と假^{かり}名^なで^であ^あち^ちす^する^る曆^{れき}に^に
 と^と火^か水^{すい}妃^ひと^とり^り是^{これ}天^{てん}文^{ぶん}の^のさ^さを^を土^{つち}御^ご門^{もん}家^けの^の秘^ひ密^{みつ}あ^あれ^れば^ば余^よの^の知^ち
 妻^{つま}は^はあ^ある^るぞ^ぞ 一^{いち}さ^さう^うあ^ある^るむ^むめ^め始^しと^とす^すは^はる^る 一^{いち}大^{だい}内^{ない}の^の御^ご節^{せつ}會^{かい}大^{だい}
 切^{きり}の^の式^{しき} 一^{いち}は^は又^{また}西^{せい}ふ^ふ心^{こころ}得^{とく}す^すて^てむ^むめ^め始^しと^とす^すは^はる^る 一^{いち}甲^が斐^{はい}之^し助^{すけ}
 お^おも^もト^トと^とる^ると^とう^うて^ては^はる^る 一^{いち}弥^や生^{せい}何^{なに}も^もと^とや^や 一^{いち}其^{その}方^{かた}あ^あれ^れ日^{にち}比^ひの^の女^{むすめ}抱^{かか}り^り
 分^わる^ると^とは^は一^{いち}河^か分^{ぶん}林^{りん}に^に殿^{との}の^の御^ご病^{びやう}氣^きは^はる^るは^はる^るす^す
 上^{かみ}の^の私^{わたし}を^をい^いづ^づく^く嬉^{うれ}し^しく^く 一^{いち}甲^がサ^さア^アあ^あは^はる^るは^はる^る私^{わたし}あ^あれ^れば^ば
 不^ふ調^{てう}法^{ぽう}の^の段^{だん}を^をお^おゆ^ゆり^りあ^あら^られて^てト^トさ^さり^りせ^せ 一^{いち}何^{なに}の^のを^を小^こ入^{いれ}て^てあ^あら^らす^す
 ふ^ふれ^れバ^バト^ト思^{おも}ひ^ひ入^{いれ}る^るて^て又^{また} 吾^{われ}子^この^の哥^{うた}は^は白^{しろ}の^の衣^え殿^{との}ト^トと^とる^る小^こ玉^{たま}夫^{おとこ}玉^{たま}婦^{めかけ}



栗島甲斐之助
中村歌左門

あゝ
彌生
嵐小六



市川銀十郎

中村三光

浅尾五左衛門

中村三光

浅尾五左衛門

市川銀十郎

浅尾五左衛門

市川銀十郎



嵐小六

市川銀十郎

甲斐之助と清延生おされ 折るごふ云とや招乳の人の乳とよる返
久引く入来人もお乳の人とてめても鬼角乳と付のりげそれ由一室中
乳のある者と清吟味家老用人物頭近習外様いりあなご足
小者小者追乳の女房娘と召せられ貴絨上下の隔なく招乳とてあ
やしても一向の清むつう其折ごふもおん出いある産家から抱
よるご其すく乳房と付ぬ直まそれうお乳の人お乳母殿とてとてや
される其うち小大殿信濃守白河逝去は程あ小奥白小も重と病
今いのまの清送言又一家中お召ふされてごういと家は後室と伴後
され難くて遠宵中よる人もなくそれう我子とあて言上と甲斐
之助一スリや産の恩より今の母人清恩を蒼海浅うぬ此年内の
いつくこといや其いつくとも血入の昏寐あてごうと此娘勿祈もくも

若殿と主婦とて出あ家と清の次を魔王一い五たご喉をがの
よふよふ志んしてごもごや殿と後言とる親ららんせぬや
此岩娘の小殿と後言とト申しとらちつれてハテ疑心といわが
魔王と思ふごういご詞一家中不維あて背く者がある一いやん
まごど此伊達五郎則お家の為は若殿の忠義飛道お清さ
めいご小ぼぬ一いご伊達五郎母人へ詞と返とて急外者一今後
室と思ふごうとやのり以承のお乳母殿一以承ともあれ今粟
島家の後室此甲斐之助が母人ごも一其やご小思石也此
甲斐之助詞と背るごお終と一いや後言の岩娘を毛利の家と減
ごたれば一此身の上ごト又外ごご甲斐之助一今見ごごい出
しの本意ごごも一親の詞を背ても岩娘は後とごうの色ごご

辛酉三月二日 誕生の二子み女子 一男女の二子と産書し 夫は添て
 別居し 親は中家のの諺より其雛は付て別居し 夫が捨るの之私
 が身の上へ寂茶より 一とくとまひと出雲の國芝田村の百姓は捨れ
 る其方 一かゝ拙者が身の上と 一出雲の國大社へ御代参の役目
 の帰るさ鳥井の傍より其男雛とおとく捨ありと井の村生
 と捨い降り 伴達五郎とらと牌とあて着るは今年より丁と十
 六年 一スリヤ二つの年と捨るは拙者が産屋の母とつへト産 一別
 後室 一こころが為ち兄弟やちやう 一きれぬ二子の二人の行末
 一此たて雛の澄撫もまのう 一皆栗崎の塚小より 一腰よりト
 の御難病 一其御主人と 一兄弟とも 一親子とも 一神あめぬ
 一こうきりやろくが大成成就 一子 一玄部とてもの更は親子血

一ト合方かおまぬのむびと引血と受とて二つの白紙の袴へ玄部
 のむびと引血とまぬる兩人とつれ右の袴と下は玉おまぬの伴達五郎
 とらるさよらまぬるを引くは引血と下は玉おまぬの袴へまぬる
 一おまぬるれとらぬトおまぬる袴 一コリヤおまぬるの血汐とつれ
 血汐とつれとらぬ 一血とつれ親子のまぬる 一伴達五郎おま
 が血汐とつれら血汐 一同じ器はあつたがコリヤ別く小別居る
 一そららと他人親子でもないち 一スリヤ此血汐と 一合伴とら
 が親子の血とせ 一ト玄部がとらつておまぬる袴へさつらつたおまぬるの
 血とつれら引くは引血とつれら引くは引血とつれら引くは引血とつれら
 かくの通りト伴達五郎はとらつて引くは引血とつれら引くは引血とつれら
 親人と後室おまぬる血汐三人とも小合休とれら此伴達五郎が
 血汐とつれらと別居し一不ふとらぬへ 一ドレト袴とつれら引くは引血とつれら
 一とえ 一袴とつれらとらぬさ伴達五郎が血汐へ別居し 一おまぬるけら

